

山口素堂の漢詩文の特色について

黄 東 遠

本稿では、山口素堂（以下、素堂と略記）の全漢詩文五十八作品について語釈を加える中で気付かされた特色について指摘するとともに、素堂の漢詩文作品に語釈を加えたものを示すこととする。

素堂の漢詩文の特色として挙げられるのは、大別して、①「隱逸性」、②「言語遊戯性」、③「人倫重視性」の三点である。このうち、①と②についてはすでに拙稿¹⁾において検討を加えたことがあるが、さらにここでその要点を簡単に紹介することにする。この際に示す番号は拙稿における素堂の漢詩文の通し番号であり、詳細はそれぞれの作品を参照されたい。

まず、①「隱逸性」を示す漢詩文作品については、内容的にさらに四つに分けることが出来る。すなわち、第一に老莊思想を自分の生活と結び付けて詠んだもの（30・32・43・47・58など）や『文選』巻第二十一「遊仙」などのごとき神仙思想を踏まえたもの（1・9・13・29など）、第二に隱者・文人趣味と結び付けられる事柄である「旅」（14・15・25など）、「月」（38・39・40・41・42）、「茶」（7・23・35）、「棋」（48）を詠んだもの、第三に田園詩人東晋陶淵明などの「田園詩」の流れを汲ん

だもの（11・12・26・28など）、第四に俗世間に対する白眼視や物質的な面に拘らない己の身の孤高性を謳歌したもの（36・44など）の四つである。

次に、②「言語遊戯性」については、大きく、漢詩文の形式上の言語遊戯性と内容的な言語遊戯性とに分けることが出来る。前者は、押韻すべきところに全て同字を用いた特異体のも（3・55・56・57）や六言六句の第一句・第二句の四・五・六字目を同音をもって配した破格体のも（34）であり、後者は、漢詩文ではなかなか見られない男女の艷情の世界を叙したも（50）や日本の諺などを取り入れながら和習を吹き込んだうえに散文のように仕上げたもの（54）である。

最後に、③「人倫重視性」の見える作品について述べる。さすがに林家に学んだ儒者素堂らしく、「孝」「色を戒める」等の人倫を叙したもの（22・50）や、君恩による太平盛世を詠み上げることによって君主への感謝を表したも（24・33）が見られる。

以下、資料として素堂の漢詩文全58作のうち、31から58までの作品に語釈を試みたものを示す。なお、形式は1から30まで

の語釈を載せた拙稿³に倣うものとする。

31 同(亥歳元旦口號)

莫恠坐馳雲水身 坐馳するを恠しむこと莫れ 雲水の身、
身隨梅柳向芳辰 身は梅柳に隨ひて芳辰に向ふ。

改端六氣往來路 改端の六氣 往來の路、
我亦乾坤一旅人 我も亦た乾坤の一旅人。

今年有行脚之志、因詠中及茲。(今年行脚の志有りて、因りて、詠中茲に及ぶ) (二二二頁)

●上平声十一真韻(身辰人)

▼宝永二年(一七〇七)作か。その根拠については30参照。

【語釈】○「坐馳」：①身はここに坐するも、心は外に馳せ廻っていること。②無為にして速やかに神化を行うこと。どちらにも取れる。「莊子盧齋口義」卷之二「人間世篇」に「吉祥、止レタマルニ、夫レ且レ止ラ、是レ之謂ニ坐馳ト」。○「雲水身」：行雲流水のように遍歴する素堂自身。○「身隨梅柳」：梅花・楊柳は春を代表する詩材。梅の香に誘われたり、柳糸が春風に靡いたりするのに隨つて逍遙する様。晚春なら「柳絮」の飛ぶ様を「柳」と

関連づけられるが、元旦吟ということで、柳の枝の意に取った。盛唐杜甫「絶句漫興」に「顛狂柳絮隨風舞、輕薄桃花逐水流」(「顛狂」：乱れ狂う様)、南朝・梁費昶「和蕭記室春日有柳所思」に「水逐桃花去、春隨楊柳歸」。○「芳辰」：芳しい春のよい季節。5参照。○「改端」：年の端が変わり、新年を迎えること。「正月」を「端月」と呼ぶこともその反映。

○「六氣」：5参照。

32 壬辰歲朝口號

送寒迎上日 寒を送りて 上日を迎ふれば、
春靜樂融々 春は靜かにして樂融々たり。

時有烟霞促 時に烟霞の促すこと有り、
何無詩筆工 何んぞ詩筆の工無からん。

凝眸台嶺外 眸を凝らす 台嶺の外、

馳思故鄉空 思ひを馳する 故郷の空。

猶誘引韶景 猶ほ韶景に誘引されて、

逍遙萬里風 萬里の風に逍遙す。

推敲 誰漏左君恩(誰が左に君恩を漏るや)

乾坤 老翁

●上平声一東韻(融工空風)

▼「壬辰」からして、正徳二年(一七一一)の作。

【語釈】○「上日」：一日。「壬辰歲朝口號」からして元旦。○「融々」：長閑な様。和らぎ楽しむ様。中唐白居易「和錢員外答盧員外早春獨遊曲江見寄長句」に「春來在色聞融融、先到詩情酒思中」。○「烟霞」：30参照。○「凝眸」：瞳を凝らすこと。晚唐温庭筠「過潼關」(「潼關」：華山の東にある地名)に「片時無事豁泉好、盡日凝眸岳色秋」。○「台嶺」：比叡山。これによつて、正徳二年に京都に旅したことが窺える。○「馳思」：思いを寄せる。24参照。○「故郷」：素堂の出生地である中斐園北巨摩郡教

来石字山口(現在の白州町)、あるいは幼少年期を過ごした甲府。○「凝眸台嶺外、馳思故鄉空」：旅地で故郷を懐かしむことは、一詩材。東晋陶淵明「歸田園居」の「鶻鳥戀舊林、池魚思故淵」。盛唐常建「泊舟打胎」(「打胎」：杭のこと)の「鄉國雲霄外、誰堪羈旅情」。○「韶景」：春の明るい景色。30参照。○「逍遙萬里風」：30参照。○「推敲 誰漏左君恩」：旅を樂しむことができるように、太平の世にしてくれた君恩に感謝する氣

旅を樂しむことができるように、太平の世にしてくれた君恩に感謝する氣

持をこめて詠んだ句。どの句の推敲かは不明。○「乾坤老翁」：素堂自身。

33 奉和歲日韵

一夜年回眼界新 一夜に年回りて眼界新たなり、
鶯花報節顯精神 鶯花節を報じて 精神を顯はず。
斤平瑞氣令猶古 斤平瑞氣 令猶ほ古のごとし、
堯日舜風萬國春 堯日舜風 萬國の春。

(一一二)～(一二三頁)

●上平声十一真韻(新 神 春)

【語釈】○「鶯花」：鶯と花。転じて、春の景。中唐白居易「春夜宴度上
戲贈「淄裴洲」に「今年相遇鶯花月、此夜同歡歌筵筵」。○「精神」：生き
生きとしている様。○「斤平」：「斤」は「かがやく」「明るい」の意をもつ
「听」の字と同じか。堀池信夫氏『漢魏思想史研究』第三章「魏晋期の思想」
には、『大人先生伝』本文の引用があるが、そこには「然らば、炎斤き火流
れ」(注26)と訓点を付けている。氏は、その根拠として『漢書』「揚雄伝」
引「甘泉賦」「乘景炎之忻忻」の顏師古注「忻忻光盛貌也」を示している。
続く「瑞氣」との意対の關係を顧慮して、氏の読みを受容し、「かがやく」
「明るい」の意と取る。「平」は「平明」のこと。だから、「斤平」は明るく
て平明のこと。○「令猶古」：「令」は、意から「今」の字に読んでおく。○
「堯日舜風」：太平盛世。24参照。

34 戊寅歲朝口號六言六句

元朝祝栢柿橘 元朝 栢柿橘を祝ひ、
今年覺百事吉 今年 百事吉を覺ゆ。
松風茶亭清談 松風は茶亭の清談にして、

鳥聲花中琴瑟 鳥聲は花中の琴瑟なり。

陶々哉斯下民 陶々たる哉 斯の下民、
太平時不曲筆 太平の時なれば曲筆せず。

(一二三頁)

●入声四質韻(橘 吉 瑟 筆)

▼「戊寅」からして、元禄十二年(二六九八)の作。

【語釈】○「元朝」：元且。○「百事吉」：「百事大吉」(何事も全て宜しい
こと)の意ではなく、歳旦吟であること、起句に「栢柿橘」と詠み込まれて
いることからして、中国の杭州における元且風習「百事大吉」と解す。『杭州
府志』「百事大吉」は「籤「栢枝手柿餅」、大橘承之、謂之百事大吉」。左
注に典故として『百川學海』をいつているが、管見では、『百川學海』に小題
をも含めて見えなかったもので、今後の課題にしたい。○「元朝祝栢柿橘」、今
年覺百事吉」：四・五・六字目を意図的に同音に詠み、戯れている。○「清
談」：高尚な話。六朝時代に流行した老莊思想を重視した「清談」のことも意
識中にあつたか。『後漢書』「鄭太傳」に「清談高論、嘘レ枯吹生」。魏劉公幹
「贈「五官中郎將「四首其三」」に「清談同「日夕」、情眇敘「憂動」。○「琴瑟」：
琴と大琴。ここでは「鳥聲」の美しさの喩え。『詩経』「國風」「周南」「関雎」
に「窈窕淑女、琴瑟友之」。○「松風茶亭清談、鳥聲花中琴瑟」：隠居の長閑
な風景描写のひとつ。中でも、松風の音などを自然の美しい音楽として捉
えるのは、例えば、『菜根譚後集』六十四「林間松韻、石上泉聲、靜裡聽來、
識「天地自然鳴佩」。○「陶々」：和らぎ楽しむ様。『詩経』「王風」「君子陽
陽」に「君子陶陶、左執「翻」(「翻」：舞者の手に持ってかざす羽根)。

35 新年書懷 三五七言

昇平化 昇平の化、

萬國風

萬國の風。

梅綻南窓白

梅は綻びて南窓は白く、

日温東海紅

日は温りて東海は紅なり。

問君老境何娛處

君に問ふ 老境何の娛しむ處あらんや、

春茗漱雲一碗中

春茗雲を一碗中に漱ぐ。(二二三頁)

●上平声一東韻(風 紅 中)

【語釈】○「三五七言」李白の「三五七言」に始まった詩体。盛唐李白「三五七言」「秋風清、秋月明。落葉聚還散、寒鴉栖復驚。相思相見知何日、此日此夜難爲情」。○「昇平」：太平をいう。中唐白居易「亞枝花」に「還似昇平池畔坐、伍頭向水自看粧」(伍：低)。○「梅綻南窓白、日温東海紅」：「東海」は「江戸湾」か。朝日の昇る際の朝焼け雲の赤い様を「紅」とした。方角と色を巧に用いた対句。「白」と「紅・赤」のよ

うな色対の例としては、盛唐杜甫の隱居「浪花草堂」における「絶句」の一聯「江碧鳥逾白、山青花欲然」(然：燃える)が連想される。但し、「東海」は、管見では、盛唐李白「古風五十九首」(三十六)に「東海沈碧水、西關乘紫雲」と詠まれたように、「碧」の詩的イメージが詩における本意であった。新しい発想とも考えられる。○「問君」：特定の間人ではなく、独り言のような樂府体に使われる漢詩表現。○「茗」：遅く摘んだ茶。唐施肩吾「蜀茗詞」に「越碗初盛蜀茗新、薄煙輕處攪來勻」(攪來：かき混ぜる。「來」は助詞。「勻」：ととのう)。○「漱雲」：茶名か、あるいは茶碗の湯気の立つ様を雲に見立てたか。茶の意「雲芽」と「漱」との取り合わせは、例えば、晚唐陸龜蒙「和皮日休詩「茅山廣文二詩」の「天寒夜漱「雲芽淨」、雪壞晴梳「石髮香」。素堂と茶については7参照。もし「漱雲」が、立つ湯気の雲の見立てなら「春茗雲に漱がれて「一碗の中」と読み下せる。

36 出武隅時品川驛 此時赴京師

竹輿破曉逐殘春 竹輿曉を破りて殘春を逐ふ、

可惜落花車馬塵 惜しむべし 落花 車馬の塵。

六十餘州民止處 六十餘州 民止まる處、

多斯名走利奔人 多くは斯れ 名走利奔の人。(二二四頁)

●上平声十一真韻(春 塵 人)

【語釈】○「武隅」：武江(江戸)の隅の意。○「京師」：京都。○「竹輿」：竹で作った輿。南宋陸游「天台縣有「小閣」下臨「官道」予爲名曰「玉霄」」に「竹輿衝雨到天台、綠樹陰中小閣開」。○「竹輿破曉逐殘春」：竹輿が曉の闇を破竹の勢いで破りながら走る様を詠んだ句であるが、次句を含めてその表現や光景が一幅の絵のように美しい。○「可惜落花車馬塵」：道に落ちた花・花びらが車馬が走るることによって、塵とともに舞い上がる様。東晋陶淵明「飲酒其五」に「結廬在人境、而無「車馬喧」。○「六十餘州」：畿内・七道の六十六国に吉岐・対馬を合わせたもので、日本全土をいう。「太平記」卷三「主上御夢事」に「六十餘州の兵を集て云々」。○「多斯名走利奔人」：七言絶句の場合「4/3」で切つて詠むのが一般的であるが、素堂の漢詩においては必ずしもそれを意識したとは限らない例が見える。36以下の作品においてもその例あり。ここではそれを反映しての読み下し文。名譽欲や利欲という野心を持ち、一生あくせくして虚名を得ようとする空しさを詠んでいる。中唐韓退之「上張僕射書」の「聞命而奔走者、好利者也。直己而行「道者、好義者也」と類想。

37 初夏即席

雨餘風色自清幽 雨餘の風色 自から清幽たり、

雲外杜鵑聲未周 雲外の杜鵑 聲未だ周らず。

紅白散埋百花後 紅白散埋す 百花の後、

一庭新樹對青眸 一庭の新樹 青眸に對ふ。 (二二四頁)

●下平声十一无韻(幽 周 眸)

【語釈】○「雨餘」：雨が止んだ後。中唐白居易「秋池二首」に「社近驚影稀、雨餘蟬聲渴」。○「清幽」：ここでは脱世俗したかのように清らかで静かな雨上がりの後の風色をいう。盛唐李白「與從姪杭州刺史良二遊天竺寺詩」に「覽雲測變化、弄水窮清幽」。○「雲外杜鵑聲未聞」：杜鵑が「初夏」早々のことであまり鳴き声ができないこと。○「紅白散埋百花、一庭新樹對青眸」：紅白を誇っていた花々が散った後に、緑樹の緑に目を向ける草屋での楽しみを捉えている。南宋陸游「新夏感事」の「百花過盡綠陰成、漠漠爐香睡晚晴」の詩情に似ている。○「青眸」：親しい人に対する目付の意であるが、ここでは人ではなく「新樹」に対しての目付をいう。「青眼」と同じ。普通「眸」の字を用いる場合は、漢詩文では「青眸」より「清眸」―清いひとみ。涼しい目元―を多く用いる。「青眼」は、「晋書」卷四十九「列傳」第十九「阮籍」の逸話から出た語。「籍又能爲青白眼、見禮俗之士、以白眼對之。及嵇喜來弔、籍作白眼、喜不憚而退。喜弟康聞之、及鸞酒挾琴造焉。籍大悅、乃見青眼」。さらに北宋蘇軾「琴枕」に「清眸作金徽、素齒爲玉軫」。

38 八月十四夜雨十五夜晴天

月斯婁宿十分明 月と斯の婁宿と十分に明るく、
雲雁呼吾動客情 雲雁 吾を呼びびて 客情を動かす。
天似有心前夜雨 天は心有るに似たり 前夜の雨、
人間改觀弄新晴 人間觀を改めて新晴を弄ぶ。

(二二四頁)

●下平声八庚韻(明 情 晴)

▼元禄五年、秋成立の芭蕉・素堂編「芭蕉庵三ヶ月日記」素堂序においても、「中の秋に至りて、はつ月のはつかなる比より、夜毎に名月の思ひをなし、くもりみはれミ、扉をおほふことまれ也」と見え、「月」に傾倒している素堂の心境が窺える。

【語釈】○「八月十四夜雨十五夜晴天」：十五夜、または十四日から十五夜にかけての天気の変わり・曇りは一詩材である。たとえば、次の39の詩に踏まえられた北宋邵康節の詩。○「婁宿」：二十八宿の一つで、西方七宿の第二宿の星。和名「たまたみぼし」。『徒然草』第二百四十段「八月十五日、九月十三日は、婁宿なり。この宿、清明なる故に、月を翫ぶに良夜とす」。○「雲雁」：雁。○「雲雁呼吾動客情」：雁は、詩においては、秋の寂しさを表すとともに、「雁信」の語もあるように、家郷を離れている「客」に便りを届けるものとして、郷愁を呼び起こす役割をする。清王士禛「聞雁」纏渺涼天數雁鳴、幾家砧杵起秋聲」。○「有心」：心に思うところあるさま。菅原道真「被拜宰相、奉謝藤納言賜鄭州玉帶」に「初自鄭州無歷至、更從臺閣有心來」(臺閣：時平邸をいう)。

39 三五夜口號

年々記得郡子吟 年々記得す 郡子の吟、
十度中秋九度陰 十度の中秋 九度の陰。
幸對月明誰用睡 幸ひにして月明に對ふれば 誰か睡を用ひんや、
良辰堪賞古來今 良辰 賞に堪へたり 古より今に來たる。
邵康節詩 一年一度中秋月 一年一度 中秋の月
十度中秋九度陰 十度の中秋 九度の陰

(二二五頁)

●下平声十二侵韻(吟 陰 今)

【語釈】○「記得」：覚える。心にしるしとどめること。15参照。○「那子吟」：「那」の字は「邵」の字の誤り。○「十度中秋九度陰」：自ら「安樂先生」と号し、晴耕雨読の生活を送った、北宋邵康節「中秋節」「二年一度中秋夜、十度中秋九度陰。求「滿直須當」夜半、要「明仍候到」天心。無「雲照處情」淺、不「睡觀時意」更深。徒愛古人詩句好、何堪千里共如今」の首聯を典拠としている。○左注「二年一度中秋月」「二年一度中秋夜」の記憶違い。素堂は他の作品(和歌・俳諧など)においても同じように記憶違いの例がある。

40 八月十五夜詣男山遊放生川

半雨半晴月 半雨半晴の月、

曳吟送半秋 吟に曳かれて半秋を送る。

隱山光淡薄 隱山の光は淡薄にして、

浮浪影清幽 浮浪の影は清幽たり。

頑霧掩宮殿 頑霧 宮殿を掩ひ、

狂雲鎖水樓 狂雲 水樓を鎖す。

未聞新雁到 未だ新雁の到るを聞かざるに、

嶺上仰鳴鳩 嶺上に鳴鳩を仰ぐ。(二二五頁)

●下平声十一无韻(秋 幽 樓 鳩)

【語釈】○「男山」：京都府八幡市にある山。石清水八幡宮がある。○「放生川」：同府同市にある川。名は、石清水八幡宮の神事「放生会」に由来する。○「隱山」：中国の湖南省の龍山、または広西省桂林県の山名であるが、ここでは男山。○「浮浪影」：放浪するかのように見える川に映った月光の様。菅原道真「奉和兵部侍郎哭舍弟大夫之作」押韻に「君悲逝

水孤浮浪、我泣「分陰共鏤」水」「分陰」：ごく短い時間。○「清幽」：脱世俗した石清水八幡宮における清らかな月光のこと。盛唐李白「過崔八丈水亭」に「高閣横「秀氣」、清幽併在君」。○「頑霧」：霧の濃い様。「狂霧」は詩に多く見られるが、「頑霧」は珍しい。○「鳴鳩」：斑鳩の異名。「詩経」「小雅」「小宛」に「宛彼鳴鳩、翰飛戾天」「宛」：小さい。「翰」：高い。

【付説】「川」「隱山」などの語や韻聯・頸聯の詩的雰囲気は北朝・奇射律金「救勒歌」「救勒川、陰山下。天似穹廬、籠蓋四野。天蒼蒼、野茫茫。風吹草低見牛羊」(「穹廬」：凹屋根の天幕の住居。「籠蓋」：引きくるめること)の前・中半部に近いものがある。この詩を意識したかも知れない。

41 三五夜口號

去歲游岩清水流 去歲岩清水の流れに遊び、

半晴半雨送中秋 半晴半雨に中秋を送る。

在家改觀今宵月 家に在りて改めて観る 今宵の月、

萬里清光入寸眸 萬里の清光 寸眸に入る。(二二六頁)

●下平声十一无韻(流 秋 眸)

【語釈】○「岩清水」：岩清水八幡宮。○「去歲游岩清水流、半晴半雨送中秋」：40参照。○「寸眸」：小さい眼。9参照。○「在家改觀今宵月、萬里清光入寸眸」：去年、居を離れて万里の彼方の岩清水八幡宮で愛でた月を、今年はその懐古しながら家で賞することを詠んでいる。中唐盧綸「晚次鄂州」「三湘愁鬢逢秋色、萬里歸心對「月明」。

42 九月十三夜

中秋吟賞等斯時 中秋の吟賞 斯の時と等しく、

昔日菅家題一詩 昔日菅家 一詩に題す。

狂雨經旬漸向霽 狂雨旬を経て漸く霽れに向ふ、
月明夜半背灯枝 月明夜半に灯枝に背く。(二二六頁)

●上平声四支韻(時 詩 枝)

菅原道真。「菅家文章」「菅家後集」に「仲秋の名月」をめでた漢詩は見えるが、「後の名月」を詠んだ例は見えない。該當作の転句「狂雨經旬漸向霽」の句意に徴すれば、「菅家文章」巻第一所収の「八月十五夜、月亭遇雨待月。探レ韻得レ无」「月暗雲重事不レ須、天從二入望一豈欺誑。夜深纔有 微光透」、珍重猶勝二到レ曉無一、または同集巻第五所収の七言古詩「雨晴對月、韻用二流字一、應製」の一聯「雲霧可レ歡又可レ愁、年華競與二月華一流」を踏まえたかも知れない。○「灯枝」：一つの燭の意。「枝の灯」のことか。「枝」は、長い柄のついている器具を数える時にも用いるから、「行燈」のことも考えられる。○「月明夜半背灯枝」：待ちに待った「後の名月」なのに天気の不順によつて思う通りに月を賞することができない、それで、四圍の暗さもあつて、明かりを灯して名月の見えることを待ち続けると、ようやく天気も回復してきて、名月を思う存分樂しめることが出来た、ということをも、「背灯枝」に凝縮させ、みごとに捉えている。

43 歳末吟

避暑衝寒年既暮 暑を避け寒を衝くに年既に暮る、
遊鞭天運速駒陰 誰ぞ天の運に鞭うちて駒陰を速めん。
今逃世路風波殆 今世路を逃るるも風波は殆く、
却恐隱家霜雪侵 却つて恐る 隱家 霜雪に侵さるるを。
鑑水更知衰老貌 鑑水更に知る 衰老の貌、

待春猶是嬰兒心 春を待つは猶ほ是れ嬰兒の心のごとし。

微軀何覓一世外 微軀何をか覓めん一枝の外、
拘影鷓鴣臥故林 拘影の鷓鴣 故林に臥す。(二二六―二二七頁)

●下平声十二侵音(陰 侵 心 林)

【語釈】○「衝寒」：寒に逆らつて進む。○「駒陰」：「駒光」。歳月のこと。「駒」が光陰の速さの意としては、「史記」「留侯世家」に「人生一世間、如二白駒過隙一」。○「避暑衝寒年既暮、誰鞭天運速駒陰」：古來、歳月の速さを嘆じるのは詩に多見される。例えば、「文選」所収の漢無名氏古詩十九首其十二の「四時更變化、歳暮一何速。同集の西晋陸機「豫章行」の「寄世將幾何、日戾無停陰」○「今逃世路風波殆、却恐隱家霜雪侵」：詩において白色を帯びる「霜」と「雪」とをもつて「老」「白髮」などの白色のイメージあり)を連想するのは(次句も参照)、一つの趣向であった。例えば、北宋蘇軾「除夜野宿常州城外二首其二」の「霜雪偏尋病客餐、但把二窮愁一博二長健一」。○「鑑水」：水かがみ。鏡などに映される老貌を嘆じるのも、詩歌の一素材。南宋陸游「夜讀二兵書一」に「歎息鏡中面、安得長二膚腴一」(「膚腴」：肉付が豊かで、色つやのよいこと)。○「微軀何覓一世外、拘影鷓鴣臥故林」：「莊子虛齋口義」卷之二「逍遙遊篇」の許由の寓話「鷓鴣巢於深林不過一技」を踏まえた句。小さいものに自足する隱者素堂自身(「微軀」「鷓鴣」)の表現で、隱者としての暮らしに満足している心を表している。○「故林」：昔なじみの林。盛唐李白「白頭吟」に「東流不レ作二西歸水一、落花辭二條羞一故林」。

44 同(歳末吟)

年々如水流 年々 水の如く流る、

歳々惜垂由 歳々 惜しむに由無し。

世外身安靜 世外の身 安靜にして、

市中聲聽幽 市中の聲 聽ゆること幽かなり。

月華時作詠 月華時に詠を作し、

金玉散爲求 金玉散ずるも求むるを爲さんや。

老境未全乏 老境未だ全く乏しからず、

陳茶飽即休 陳茶に飽きれば即ち休む。(二二七頁)

●下平声十一 无韻(流 由 幽 求 休)

【語釈】○「垂由」：国会図書館蔵本「素堂家集」には「無由」とある。詩意から「無」の字を取った。○「世外身安靜、市中聲聽幽」：俗世を離れた葛飾の隠居における楽しみを詠んだ一聯であるが、詩全体的なイメージを考えれば、「市中」に「市隱」をきかせている。○「月華」：月の光。菅原道真「夏夜對渤海客」、同賦「月華臨靜夜」詩。題中取「韻、六十字成」に「舉」眼無「雲霧」、窓頭詠「月華」。○「金玉」：金と玉。転じて、貴重なものの喩えであるが、次句からして、お金のこと。「老子」「持而盈之章第九」に「金玉滿堂、莫之能守」。西晋陸士衡「挽歌詩」首其二「金玉素所佩、鴻毛今不振」。○「陳茶」：「陳」とはあらいの意。粗末な茶。7参照。

45 同(歳末吟)

靜觀日月運行頻 靜觀す 日月の運行頻なるを、

猶是名奔利走人 猶ほ是れ名奔利走の人。

把鏡嗟嘆非昔我 鏡を把りて嗟嘆す 昔の我にあらざるを、

任他七十有餘身 任他す 七十有餘の身。(二二七頁)

●上平声十一 真韻(類 人 身)

【語釈】○「靜觀」：靜かにこと。ものを観すること。中唐白居易「自題」

寫真「時爲翰林學士」に「靜觀神與骨、合是山中人」。○「日月運行頻」：歳月が速く過ぎること。北宋黄山谷「次韻字瞻和王子立風雨敗書屋「有」感」に「師儒竝世難、日月過箭疾」。○「名奔利走人」：36参照。○「把鏡嗟嘆非昔我」：「老」を嘆くのは一詩材。例えば、盛唐李白「將進酒」に「又不見高堂明鏡悲白髮、朝如青絲暮如雪」、中唐白居易「生離別」に「前去五十有幾年、把鏡照面心茫然」。○「任他」：辞典的な意は、他に委ねてなるままに任せることであるが、裏側には隠者らしく、世事はどうでもいいのか、という超然さがある。菅原道真「九月盡日、題殘菊、應太上皇製」。同勅「寒殘看闌」に「幸披君臣交畝種」、任他意氣滿園殘」。

46 同(歳末吟)

無成年既暮 成らずして年既に暮る、

誰又駐駒陰 誰か又駒陰を駐どめんや。

普通世波殆 普通世波の殆きを遁るるに、

還惶寒濕侵 還つて寒濕に侵さるるを惶る。

感時聊述思 時を感じて聊か思ひを述べ、

鑑老更慙心 老に鑑みて更に心に慙づ。

好是芳春近 好きかな是れ 芳春の近きこと、

約花遶故林 花を約ねて 故林を遶る。(二二八頁)

●下平声十二 侵韻(陰 侵 心 林)

【語釈】○「無成年既暮」：年初計画したことを達成しなかつたうちに歳末になったこと。○「普通世波殆」：素堂が延宝七・八年頃に俗世間を離れて隠棲したこと自体を指すと思われるが、万一、実際に世事の殆きことがあつたとすればそれは不明である。古代中国の多くの隠者が政治と絡んで、

身の安全のために隠遁したことから着想した架空の句かも知れない。○「誰又駐駒陰」：43参照。○「鑑老」：43参照。○「故林」：ここでは庭。43参照。

47 同（歳未吟）楚辭體

太初有物兮名渾沌 太初「物」有り「渾沌」と名づく、
百骸既備兮成人間 百骸既に備はりて「人間」と成る。

奔走世路歳年暮矣 世路を奔走して歳年暮れたり、
今幸求閑兮得斯閑 今幸ひに閑を求めて 斯の閑を得たり。

（二二八頁）

●上平声十三元韻（沌 間 閑）
▼八言四句

【語釈】○「楚辭體」：楚屈原「楚辭」の文章に倣つて、助詞「兮」を入れて詠む詩体。○「物」：多意。ここでは「渾沌」——大昔、天と地がまだ分かれていない状態——をいう。「莊子廣齋口義」卷之三「応帝王篇」の「中央之帝」爲「混沌」の言を下敷きとする。「莊子」「応帝王篇」における「混沌」の例は無為無策が最上であることを物語る。つまり、「混沌之徳」。○「百骸既備兮成人間」：「百骸」は「多くの骨」「身体全部」の意。典故は、「莊子廣齋口義」卷之二「齊物論篇」の「百骸九竅六藏骸而存焉、吾誰與爲親」に「親」を「親」に「ト」。「奔走世路歳年暮矣、今幸求閑兮得斯閑」：一年間世事のために奔走するしかなかったが、年末になり、やっと閑を得ることが出来たとのこと。東晋陶淵明「歸田園居」其二の「戸庭無塵雜、虛室有一餘閑」久在「樊籠裏」、復得「反自然」のような心境であるが、結句の典故は、中唐白楽天「小閣閑坐」の一聯「吾亦適所願、求閑而得閑」であらう。

48 餞別

霜雪未降無物侵 霜雪未だ降らずして 物の侵さること無し

離筵相祝古來今 離筵相祝り 古より今に來たる。

先思爐上招賓客 先づ爐上を思ひて 賓客を招く、
又是棋聲響竹陰 又是れ棋聲 竹陰に響く。

（二二八―二二九頁）

●下平声十二侵韻（侵 今 陰）

【語釈】○「離筵相祝古來今」：「離筵」は送別の宴席のこと。初唐宋之間「送司馬道士遊天臺」に「羽客笙歌此地遠、離筵數處白雲飛」。○「又是棋聲響竹陰」：隱者素堂にふさわしく、南園などに見られる中国の隱者・文人趣味「棋」「竹」の字を仕立てている。素堂の隱居には「人見竹洞詩文集」卷之二において「竹徑門深、荷花池涼。松風繞圃、瓜茄滿畦。最長塵外之趣也」と見えるように、實際に「竹」が植えてあったのが分かる。「棋」と「竹」の字の取り合わせは、盛唐杜甫「因許入奉寄江寧叟上人」に「棋局動隨幽澗竹、袈裟憶上泛湖船」。

49 奉獻弓 號旭 一張並小詩一篇

言行如的取其中 言行的の如し 其の中を取る、
旭日射光西又東 旭日光を射すこと 西又東。

萬物靜觀無理外 萬物の靜觀 理外無し、
乾坤握手一張弓 乾坤手を握る 一張の弓。 （二二九頁）

平井氏秀清、以弓一張獻君。欲加語詩、請於素堂。放之代秀清賦焉。
（平井氏秀清、弓一張を以つて君に獻ずる。諸に詩を加へんと欲して素堂に請ふ。之れに放りて秀清に代はつて賦す）

●上平声一東韻(中 東 弓)

【語釈】○「中」：「中庸」における「中」のことをも踏まえたのであろう。
11「和」参照。○「靜觀」：45参照。○「旭日射光西又東」：「旭日」の語は、
注記「號旭」のことから縁をもつて案じ、「射」に「光」と「弓」を掛けた。
○「理」：朱子学の理氣一・二元論の「理」。大きっぱに言えば、天地の道
理、摂理のこと。○「乾坤」：天地のこと。○「乾坤握手一張弓」：天地間で
弓を射るといふ浩然の氣を歌っている。○「平井氏秀清」：『升堂記』(東京
大学史料編纂所蔵本)、『新訂寛政重修諸家譜』(続群書類従完成会 一九六
五年)、『江戸幕府旗本人名事典』(原書房 一九八九年)、『江戸幕臣人名事
典』(新人物往來社 一九九七年)を検討しても不明。

50 【画贊】題下高野師直見鹽治判官高貞之妻出浴室之圖上。

唐明皇、貴妃與相共浴而終亂國。本邦久米仙人見洗物女之肌
白而失通。況犯他人妻乎。
(高野師直鹽治判官高貞の妻が浴室より出づるのを見る圖に題
す。唐の明皇、貴妃與相ひ共に浴して、終に國を亂す。本邦の
久米仙人洗ひ物をする女の肌の白きを見て、通を失ふ。況んや、
他人の妻を犯すは。)

見見美人肌 見見す 美人の肌、
芙蓉出水時 芙蓉 水より出づる時。

何誰情不發 何んぞ誰か情を發せざらんや、
止禮莫邪思 禮に止まりて邪に思ふこと莫れ。

古語曰發情止禮儀(古語曰く、情を發するも禮儀に止まる)

(二一九―二二〇頁)

●上平声四支韻(肌 時 思)

【語釈】○題下高野師直見鹽治判官高貞之妻出浴室之圖上：『太平記』卷

第二十一「鹽治判官讒死之事」の「師直(中略)鹽治ガ館へ忍ビ入ヌ。二間
ナル所ニ、身ヲ側メテ、垣ノ隙ヨリ闖ヘバ、只今此女房湯ヨリ上リケリト覺
テ、紅梅ノ色コトナルニ、水ノ如ナル練貫ノ小袖ノ云々」を画材にした図で
あろう。この場面は菊池容齋などの浮世絵の画材となった。○「本邦久米仙
人見洗物女之肌白而失通」：典故は、『徒然草』第八段「久米の仙人の、
物あらふ女の脛の白きを見て、通を失ひけんは、誠に、手足はだへなどの
きよらに肥あぶらづきたらんは、外の色ならねば、さもあらんかし」。○「芙
蓉：中唐白樂天「長恨歌」の「芙蓉如面柳如眉、對此如何不淚垂」
のように「美人の顔」の意として用いられた例が多いが、ここでは女人の美
しい姿「芙蓉姿」の意と取った。○「止禮莫邪思」：『詩經』「國風」周南
「閨雎序」の「發情止禮義」の言を典故とする。なお、『太平記』卷第二十
一「鹽治判官讒死之事」において師直が浴室の高貞の妻を覗き込む場面の記述
前に配された、「サナキダニ重ガ上ノ小夜衣我妻ナラヌ妻ナ重ソ」の歌も、
この句の句案に何らかの影響を与えたのであろう。同歌は『新古今和歌集』
卷第二十「釈教歌」に「不邪姪戒」として「193さらぬだにをもきがうへに小
夜衣わがつまならぬつまな重ねそ」と収載する(引用は新日本古典文学大系
所収本)。

51 前に「山市晴嵐を畫て、かけものに詩作れ、とありければ」
との文あり。

漁樵交易道相通 漁樵交易して道相ひ通ずり、
聲在煙嵐翠蜜中 聲 煙嵐に在りて翠蜜の中。
人散暮山如大古 人 暮山に散じて大古の如し、
市橋不改入殘虹 市橋改めずして殘虹に入る。

●上平声一東韻(通中 虹)

【語釈】○「山市」：山中のまちなち市。南宋陸游「早行」に「山市人經饑饉後、孤生身老道途中」。○「晴嵐」：晴れた日に蒸発する山気。○「山市晴嵐」：瀟湘八景、つまり、平沙落雁・遠浦歸帆・山市晴嵐・江天暮雪・洞天秋月・瀟湘夜雨・煙寺晚鐘・漁村夕照の一つ。瀟湘八景は、近江八景をも含めて日本に多く影響を与えた。詩材・画材としても。○「漁樵」：漁師ときこり。詩歌では隠者、または隠者の居住する周辺風景にふさわしい人物像として多く詠まれた。ここでも中国の文人・画家たちが作品の主題とした「山市晴嵐」に似合う人物像として案じられている。○「翠蜜中」：誤植・誤写か。句意から「翠密」が正しい。「翠密」は青々と茂った草木。○「聲在煙嵐翠蜜中」：次句と合わせて吟味すると、盛唐王維「鹿柴」の「聯「空山不見人、但聞「入語響」の世界が自ずと連想される。○「市橋」：市にある橋。○「殘虹」：消えかかった虹。盛唐岑參「早秋與「諸子「登「虢州西亭「觀眺詩」に「殘虹挂「峽北、急雨過「關西」。

52 牡丹題北辰(国会図書館蔵本「素堂家集」)

魏紫姚黃何競炎 魏紫姚黃何んぞ炎く競ふや、
 天工鏤雪作清粧 天工 雪を鏤みて清粧と作す。
 北辰傍若無衆白 北辰 傍に衆白無きが若し、
 見々花中南面王 見々す 花中の南面王。

●下平声七陽韻(粧 玉)

【語釈】○「北辰」：北極星。中国では、この星の動かぬことをもって「天の樞」といい、「天子の位」とした。結句において「南面王」としたのもそれによる。花中の王と言われる「牡丹」から「天子」と関連付けて「北辰」

と名付けたのである。○「魏紫姚黃」：牡丹の異名。魏家・姚家ともに牡丹を植えた中国古代の名家。「圓機活法」「百花門」「牡丹」項の「事實」に「姚黃「西京雜記」姚家有「黃牡丹」也、「魏紫「上「西京雜記」花之奇ナル者、有「姚黃魏紫。而魏家、紫牡丹ナリ、元政「新編覆醬集」卷之一「白牡丹」に「不比姚家ニ不「魏家ニテラ」。○「若無衆白」：牡丹の花の白さの故、周囲の白色を帯びるものが無いのに等しいとの意。白牡丹は唐詩から多く詠まれ始めた詩材。○「南面王」：君主は南面し、臣下は北面したことによる。「莊子「虞齋口義」卷之六「秋水篇」の「吾安「能「乗「南面王「樂「而復為「人間之「勞「乎」の言を踏まえる。さらに「圓機活法」「百花門」「牡丹」項の「敘事」に「歐陽求叙花釋名云として紹介された「錢思公常曰、人謂「牡丹、為「花王、云々」も参考すべきであろう。

【付説】全体の詩意が晚唐皮日休「牡丹」「落盡殘紅始吐芳、佳名喚作百花王。競誇天下無雙艶、獨占人間第一香」に似ている。

53 莊子贊

枯木冷灰物我同 枯木冷灰 物我同じ、
 遊魂化蝶舞春風 遊魂は蝶に化して春風に舞ふ。
 夢中說夢傳千歲 夢の中に夢を説くこと千歳に傳ふ、
 真夢未醒誰識終 真夢未だ醒めざるに誰か終りを識らん。

●上平声一東韻(同 風 終)

▼詩の左に「素堂主人來雪書」との署名がある義仲寺藏素堂真蹟本(芭蕉門古人真蹟「義仲寺・落柿舎刊(一九九二年)による。

【語釈】○「枯木冷灰」：題「莊子贊」からして、典拠は、「莊子「虞齋口義」卷之一「齊物論篇」の「形「固「可「使「如「槁木、而心固「可「使「如「死灰乎」。○「物我同」：「莊子「虞齋口義」卷之一「齊物論篇」の趣旨――

物を奇しくする論——に則つた表現と見てよい。○「遊魂化蝶」：「遊」は浮かぶこと。莊周が夢中に蝶に化した「莊子鷹齋口義」卷之一「齊物論篇」の「昔者莊周夢_レ為_二胡蝶_一。栩栩然_{トシテ}胡蝶也」（栩栩然：喜ぶ様）の事を踏まえる。○「夢中說夢傳千歳、真夢未醒誰識終」：「莊子」思想が千年の時空を越え、現今に伝わるとの意であるが、「莊子鷹齋口義」卷之一「齊物論篇」の「夢之中又占_二其夢_一」の言も片鱗のな下敷の理由として考えられる。「夢」の連関語「醒」を取り合わせ、莊子思想が現今まで伝わってきたように後世にも続けて伝わってゆくのだからであろうということを、神仙・仙人などが忽然と消えることが思い浮かぶ「誰識終」の言に託している。

54 【画賛】

荒木田千町吟 荒木田の千町の吟、
滑稽風冠古今 滑稽の風は古今に冠たり。

後学為拾落葉 後学 落葉を拾はんが為、

成稻雀入俳林 稻雀と成りて俳林に入らむ。

●下平声十二侵韻（吟 今 林）

▼神宮文庫藏素堂真蹟本「荒木田守武像」（松尾芭蕉画、山口素堂賛）による。詩の左に「葛師隱士素堂賛」との署名あり。

【語釈】○「荒木田」：荒木田守武（一四七三～一五四九）。伊勢神宮の神官で、俳諧連歌の作者として名を馳せた。作品としては、「俳諧之連歌独吟千句」など多い。○「千町吟」：「町」は、①面積の単位。一町は、三六〇〇または三〇〇〇歩、②距離の単位。一町は六〇間で、約一〇九メートル。ここでは多くの吟の意。「千町」は和泉。○「後学為拾落葉、成稻雀入俳林」：第一句の荒木田の「田」から「稻雀」を連関語として連想し、さらに「落葉」の縁で「俳林」を取り合わせている。我々後進の者である「稻雀」は、

俳諧の世界「俳林」でただ偉大な先達守武の落ち穂拾いをしてるだけであるとした一聯。

芭蕉老人有_レ故、赴_二郷國_一。老人常謂、「他郷即吾郷、今猶莫_レ作_レ戲斯語_一、吾何不信_レ斯語_一乎。因綴_二卑語三絶_一、以投_二頭陀_一。初冬念五 素堂山子（55）57の前書

（芭蕉老人故有りて、郷國に赴く。老人、常に謂ふ、「他郷は即ち吾郷なり、今猶ほ斯の語に戯ぶれること作すこと莫かれ」と。吾れ何んぞ斯の語を信じざらんや。因つて、卑語三絶を綴りて、以つて、頭陀に投ず。初冬念五（十月二五日）素堂山子）

55 其一

君去蕉庵莫止郷 君蕉庵を去りて郷に止まること莫かれ、
故人多處即成郷 故人多處 即ち郷と成す。

風飡露宿豈勞意 風飡露宿 豈意を勞せんや、

胸次素無何有郷 胸次 素より「無何有の郷」。

●下平声七陽韻（郷 郷 郷）

【語釈】○「老人常謂他郷即吾郷」：芭蕉著「野ざらし紀行」（貞享元年）における芭蕉の句「秋十とせ却て江戸を指す故郷」などを踏まえた表現。○「故人多處即成郷」：句意に沿う例としては、中唐嚴維「送_二鄭有人_一蜀」の「在_二世誰非_レ客、還_二家即是郷_一」。○「風飡露宿」：「飡」は食べるの意。普通は「風餐露宿」という。風にさらされ露にぬれて野宿すること。南宋陸游「宿_二野人家_一詩」に「老來世路渾暗盡、風餐露宿未_レ覺非」。○「胸次」：胸のうち。「莊子鷹齋口義」卷之七「田子方篇」に「喜怒哀樂、不入於胸次」。○「無何有郷」：「無何有之郷」に同じ。虚無無為の仙境で、「莊子」

に説く理想郷「莊子慮齋口義」卷之二「逍遙遊篇」の「今子（恵子）有大樹、患其無用、何者不爾樹之於無何有之郷、廣漠之野、彷徨乎無爲其側、逍遙乎寢中臥其下」との言を踏まえる。さらに芭蕉「野ざらし紀行」（貞享元年）の「千里に旅立て、路糧をつ、まず、『三更月下無可に入』と云けむ、むかしの人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋をいづる程、風の声、そゞる寒げ也」の言も念頭に置いただらう。

56 其二

弱笠瘦筇寄一身 弱笠瘦筇に一身を寄す、

離筵回首惱吟身 離筵回首して吟身を悩ます。

河邊楊柳無由折 河邊の楊柳折るに由し無し、

早動翠條迎老身 早く翠條を動かして老身を迎ふ。

●上平声十一真韻（身 身 身）

【語釈】○「弱笠瘦筇寄一身」：俳諧・旅に徹したために身の瘦せた風雅人としての芭蕉の形容。詩歌のために身がやつれることは漢詩の一素材である。また、「筇」の語から東晋陶淵明のこと「荷篠丈人」が自ずと連想される。○「離筵」：48参照。○「回首」：振り返り見る。○「伏湛伝」に「四方回首 仰望京師」。○「離筵回首惱吟身」：別れる際の名残惜しさを巧みに表現している。盛唐皇甫冉「送魏十六」に「歸舟明日毘陵道 回首姑蘇是白雲」。○「楊柳」：「楊」は川柳、「柳」はしたれ柳。中唐楊巨源「折楊柳」に「水辺楊柳趨塵糸、立馬煩君折一枝」（趨塵：こうじのかび。かびの色が黄緑色なので柳の芽の毛に喩える）。○「河邊楊柳無由折」：六朝時代の地誌「三輔黃圖」を参考にすれば、漢代、長安の人が客を送って灞橋に至り——長安の東にあった——春の柳の枝を折って環に結んで別

る慣わしがあった。それが漢詩や樂府に反映され、「折楊柳」といえば、悲しみを思い起こさせる「送別」、または「送別を奏する曲」——「關山月」「梅花落」などととも楽府題として六朝・唐の詩人たちに多く歌われた——として転じてゆく。漢詩の例としては、初唐郭震（振）とも言う）の代表作の一つである「子夜春歌」「陌頭楊柳枝、已被春風吹。妾心正斷絶、君懷那得知」（陌頭：街頭）などを、樂府の例としては、盛唐李白「春夜洛城聞笛」の「此夜曲中聞折柳、何人不起故園情」などを挙げられる。この句では離別に際して、春に折る柳の枝を、春でもないのに、柳の枝を折るうとしても折ることが出来ないとしたところに、素堂の遊戲・滑稽としての狙いがある。○「翠條」：翠の條。「條」は「糸」とも。盛唐李白「子夜吳歌其一」に「素手青條上、紅粧白日鮮」。

57 其三

陰月稱陽又小春 「陰月」は「陽」と稱し 又「小春」、

小春又那似陽春 「小春」又那「陽春」に似たらんや。

舉盃皮裏陽春在 盃を舉ぐれば皮裏に「陽春」在り、

爲唱陽關一曲春 爲に唱ふ 陽關一曲の春。

●上平声十一真韻（春 春 春）

【語釈】○「陰月」：陰曆四月の異名。純陽の月。起句・承句とも『西京雜記』卷五「四月陽離用事、而陽不獨存、此月純陽、疑于無陰、故亦謂之陰月」の言などを踏まえている。○「陰月稱陽又小春」：「陰月」（陰曆四月）を「小春」（陰曆十月）とは称しない。素堂の記憶違いであろう。それとも次句の「陽春」の語を引き出すために無理して詠み込んだか。○「陽春」：陽気の動き出す暖かな春。楚屈原「楚辭」「蔽忌「哀的命」に「願壹見陽春之白日」兮。○「舉盃皮裏陽春在」：「皮裏」は杯の裏側。結

句の「陽關一曲春」を導くための洒脱。「陽春」には酒名を掛けていると思われる。○「陽關一曲」：送別の詩の意で、多くは「陽關三疊」という。「陽關一曲」の例としては、北宋黃庭堅「夜發分寧寄杜澗叟」に「陽關一曲水東流、燈火旌陽一釣舟」。「陽關三疊」は、送別の際、次に挙げた盛唐王维の陽關（中国甘肅省西部、敦煌県の西南にあった関門）の曲を三回歌うことに由来する——正格は全詩を歌ってから第二句以下を再び歌う。日本では全詩を歌ってから「無からん無からん、故人無からん、西のかた陽關を出づれば故人無からん」と重ねる。盛唐王维「送元二使安西」「渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人」（「渭城」：秦の都であつた咸陽のこと）。

【付説】七言絶句三首とも起・承・結句の押韻すべきところに同字を用いる特異性がある。これについては別稿「山口素堂の漢詩文——言語遊戯性に注目して——」（注）（一）において検討をした。

58 歲朝雪

晦朔循環同不同 晦朔の循環 同不同、

蛤之始矣雀之終 蛤の始まり 雀の終りなり。

乾坤湧出新年雪 乾坤に湧き出づ 新年の雪、

寒暖未分藁籥風 寒暖未だ分かつ 藁籥の風。

●上平声一東韻（同終風）

▼素堂真蹟本（『俳文学大辞典』『素堂』項の写真版）による。

【語釈】○「晦朔」：晦日と一日。盛唐孟浩然「赴京途中遇雪詩」に「窮陰連晦朔、積雪遍山川」（「窮陰」：冬の末。陰気のきわまる時の意）。

○「晦朔循環同不同」：典故は、「文選」所収の晋郭璞「遊仙詩七首其七」の「晦朔如循環、月盈已復魄」を踏まえている。○「蛤之始矣雀之終」：礼

記「月令第六」の「爵入大水爲蛤」の言などの踏まえ。『滑稽雜談』（正徳三年）九月の項に「季秋の月、爵大水に入りて蛤となる」。その意味は『禮記主疏』（八一五年阮元刻本 卷十七「月令」「季秋之月」）によれば「鴻雁來賓、爵入大水爲蛤、鞠有黃華」の言について「皆記時候也」と疏す。「爵」が秋になり海に潜つて「蛤」へ変わるということ（『禮記』、歳朝吟という）ことで、逆に海の中から「蛤」が飛び出して「爵」になると詠んでいる（「蛤」から「爵」になることには典故なし）○「藁籥」：ふいご。鍛冶屋などで火を起こすのに用いる送風器であるが、「ふいご」の意に取れば、句の意味が通じない。おそらく、「老子」「天地不仁章第五」の「天地之間、其猶橐籥乎。虛而不屈、動而愈出。」（「猶」の左に訓点「キ」あり）を踏まえての「天地のこと」と見るべきであろう。

【注】

（一）「隠逸性」については「山口素堂の漢詩文私注——『隠』の検討のために——」（日本語学会『日本語文学』第14、2004年五月、在韩国学会誌、『言語遊戯性』）については「山口素堂の漢詩文——言語遊戯性に注目して——」（和漢比較文学会『和漢比較文学』第13号、2004年八月）において検討をした。

（二）「山口素堂の漢詩文語釈（上）」（筑波大学大学院博士課程「日本文化研究学際カリキュラム紀要『日本文化研究』第15号、2004年三月）における1から30までの作品、さらに本稿において資料として紹介した31から58までの漢詩文の通し番号である。

（三）（二）の「山口素堂の漢詩文語釈（上）」。

【前掲拙稿（『山口素堂の漢詩文語釈（上）』）の補足】

1から30までの作品に語釈を試みた前掲拙稿が雑誌に出た以後、その時

に気が付かなかつたことや知らなかつたことを以下に補充語釈す。この際、付した通し番号は作品番号を意味し、「○」印を付けたのは該当項目を表す。

9○「玉簪携手上飛樓：友人（漢の李陵と蘇武）の悲しい別れとして知られる「河梁別」、つまり、『漢書』李陵傳「陵以詩贈別曰、携手上三河梁」、游子暮何之」の言から借辞をしたかも知れない。

15○「人間萍水會、旅泊是生涯」：頸聯において盛唐李白「月下独酌」が踏まえられていて、さらにこの一聯の詩意に基づけば、同じく盛唐李白「春夜宴桃李園序」の「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生若夢、爲歡幾何。古人秉燭夜遊、良有以也」の言を踏まえたと考えられる。

26○「乾坤一草堂」：最初は「乾坤の一草堂」と読み下したが、「貯乾坤於一壺」という表現もあり、したがって、天地のことがこの小さな一草堂の中に全て存在することも取れるので、「乾坤は一草堂」と読み下した。盛唐杜甫「暮春題西新賃草屋」五首其三の頷聯「身世雙蓬鬢、乾坤一草亭」からの借辞か。

27○「未到鷄鳴行脚心」：隱居における吟ということを考えれば、晋王康琚「反招隱」の一聯「鷄鳴先晨鳴、哀風迎夜起」を踏まえたかも知れない。

28○「居然愛我家」：後の隱者・文人に大きく影響を与えた東晋陶淵明「讀山海經十三首其一」の一聯「衆鳥欣有託、吾亦愛吾廬」を踏まえている。

29○「嘯」：ここでは詩歌を詠むことであるが、頷聯とその以下の聯の詩意に基づけば、「嘯」の本来の意である神仙の養生術「嘯」のことも踏まえられていると考えられる。

【付記】

本稿を成すに際して、堀池信夫先生・清登典子先生・谷口孝介先生から貴重な御教示・御指導を賜った。記して厚くお礼を申し上げる。但し、御教示・御指導に従わなかつたところもあり、それによる間違いについては稿者の責任であることを明記する。

（ファン ドンウォン 筑波大学大学院博士課程

文芸・言語研究科 学際カリキュラム）